

[特集] 青葉山の生物相

青葉山市有林（仙台市）の哺乳類相

移川 仁*・斎藤千映美**・溝田浩二**

Mammal Fauna of the Aobayama Area, Sendai City, Northeastern Japan

Jin UTSUSHIKAWA, Chiemi SAITO and Koji MIZOTA

要旨：青葉山市有林（仙台市）には、100万都市の市街地に隣接しているとは思えぬほど多様性に富んだ動植物が生息している。この森を環境教育の観点から捉え、フィールドミュージアムとして積極的に活用していくためには動植物の継続的な生態調査が欠かせない。1994年～2005年の11年余、青葉山市有林の哺乳類相に関する継続的な調査を行なった結果、7目14科25種の哺乳類が確認された。

キーワード：青葉山市有林、哺乳類、フィールドミュージアム、生物多様性、環境教育

1. はじめに

青葉山は仙台市街地の西方に広がる緑濃い丘陵地であり、古くから“杜の都”の象徴として親しまれてきた。人口100万人の大都市の市街地に隣接しているとは思えぬほど多様性に富んだ動植物が息づいているこの丘陵地を、宮城教育大学環境教育実践研究センターではフィールドミュージアム（Field Museum）に選定し、これまで積極的に環境教育の場で活用してきた。フィールドミュージアム構想では、青葉山の動物や植物といった自然全体を生きた「標本」に、青葉山はそれらがあるがままの姿で展示してくれる「博物館」に見立てている。そして、それらの優れた素材を“環境教育”という観点から捉え、整理し、有機的につなげていくことで、子どもたちの無限の興味や関心を引き出し、育んでいくことを目標としている。

フィールドミュージアム構想は、大きく二つの柱から成り立っている。一つは青葉山の動植物の生息状況や分布の実態といった基礎調査を行うことであり、それらの生物相調査の成果を総合することによって、青葉山の自然の全体像を把握することである。もう一つは、それらの調査成果を教育という視点からアレンジし、有機的に関連づけ、それに基づいた環境教育プログラムを作成し、地元の小・中・高校の授業教材とし

て積極的に提供していくことである。この、フィールドミュージアム構想を通して、環境教育を、環境問題に関するたくさんの情報を一方的に詰め込む教室の授業という狭い枠から脱皮させ、小・中・高校の児童・生徒たちに教室と野外とをイキイキと連結させる実践の場とすることができる（伊沢，1998）。また、そうすることで、市民の財産としての青葉山をもっとも良い形で将来にわたって保全していくことも可能となるだろう。

本報告では、1994年7月～2005年12月までの11年余の間に実施した青葉山の哺乳類相に関する調査結果を報告する。

2. 調査地および調査方法

1) 調査地

調査を行なったのは、仙台市街地の西方に広がる青葉山市有林である（図1）。市有林は、北緯38度14～15分、東経140度51～52分に位置し、標高差は、市有林北端の三居沢入口（標高50m）から、市有林南端の青葉台（標高190m）にかけて約140mある。総面積は130haであり、その中を起伏に富んだ遊歩道が網の目状に整備されている。

この地域の植生は暖温帯を代表する常緑広葉樹林

*青葉山の緑を守る会，**宮城教育大学環境教育実践研究センター

と、冷温帯を代表する落葉広葉樹林との移行帯にあたり、中間温帯林が成立している。この植生を代表する自然林はモミ・ブナ林で、これが青葉山市有林の極相林である。ここではモミを主体として、イヌブナ、イヌシデ、アカシデ、アサダ、クリ、イタヤカエデなどの落葉高木が混生し、下生植物にはヤブムラサキ、アオキ、ヤブコウジ、オオバジャノヒゲ、ヒメカンスゲなどが多く生育している。現在は人手が加わって、コナラ、クリ、アカマツ等を交えた二次林に変わっている林分も少なくない。

2) 調査方法

青葉山の緑を守る会では、1994年7月～2006年1月までの11余年の間に、毎月1度のペースで青葉山自然観察会を実施してきた。動物相の調査は、主としてこの観察会の当日あるいは事前のコース下見の際に実施したものに、補足調査の結果を加えたものである。

①フィールドサイン調査および目撃調査：哺乳類の活動の痕跡を示す足跡、糞、食痕、坑道等の生活痕の観察（フィールドサイン法）および活動個体の直接観察を行なった。

②罠による捕獲調査：ネズミ類の調査法で、本調査地においてはピットフォールトラップ（墜落缶）およびシャーマン式トラップ（箱罠）による捕獲調査を実施した。なお、捕獲調査にあたっては宮城県より捕獲許可を取得している。

③聞き取り調査：地域住民、研究者等を対象とする聞き取りにより、情報を補完した。

3. 結果と考察

1) 確認された哺乳類

調査の結果、以下に示す7目14科25種（ノイヌ、ノネコを含めると7目15科27種）の哺乳類を確認した。リストに掲載されている種の和名、学名、掲載順に関しては、阿部（1994）に従った。

モグラ目 Insectivola

トガリネズミ科 Soricidae

1. カワネズミ *Chimarrogale himalayica*

2. ジネズミ *Crocidura dsinezumi*

モグラ科 Talpidae

3. ヒミズ *Urotrichus talpoides*

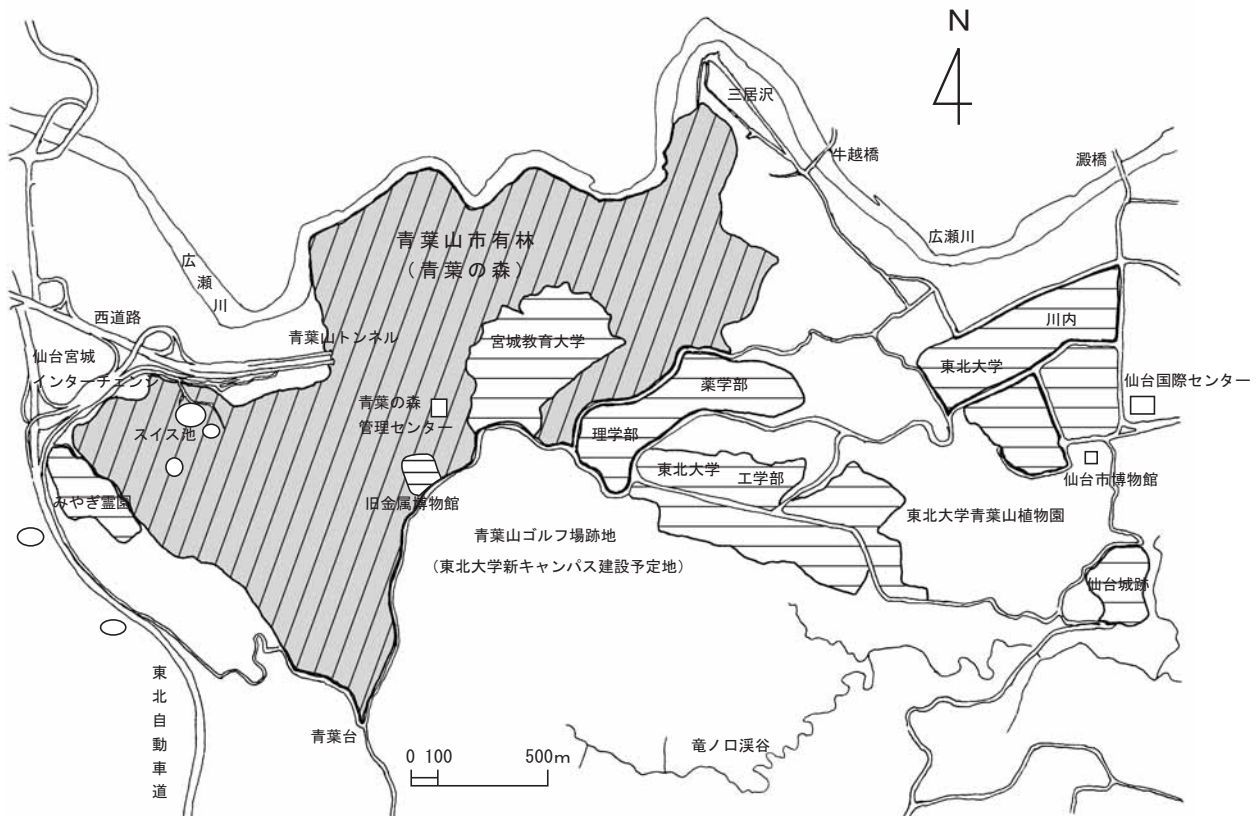


図1. 青葉山市有林の概略図

4. アズマモグラ *Mogera wogura*

コウモリ目 Chiroptera

キクガシラコウモリ科 Rhinolophidae

5. キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum*

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

6. モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus*7. アブラコウモリ *Pipistrellus abramus*8. ヒナコウモリ *Vespertilio superans*

サル目 Primates

オナガザル科 Cercopithecidae

9. ニホンザル *Macaca fuscata*

ウサギ目 Leporidae

10. ノウサギ *Lepus brachyurus*

ネズミ目 Rodentia

リス科 Sciuridae

11. ニホンリス *Sciurus lis*12. ムササビ *Petaurista leucogenys*

ネズミ科 Muridae

13. ヤチネズミ *Eothenomys andersoni*14. ハタネズミ *Microtus montebelli*15. ヒメネズミ *Apodemus argenteus*16. アカネズミ *Apodemus speciosus*

ネコ目 Carnivora

クマ科 Ursidae

17. ツキノワグマ *Ursus thibetanus*

イヌ科 Canidae

18. キツネ *Vulpes vulpes*19. タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

イタチ科 Mustelidae

20. テン *Martes melampus*21. イタチ *Mustela itatsi*22. アナグマ *Meles meles*

ジャコウネコ科 Viverridae

23. ハクシビン *Paguma larvata*

ウシ目 Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

24. イノシシ *Sus scrofa*

ウシ科 Bovidae

25. カモシカ *Capricornis crispus*

2) 青葉山市有林における哺乳類の生息概況

藪のある草地や林にはノウサギが、アカマツ、スギなどの木立のある樹林地にはニホンリスが広く分布している。北斜面の崖地にはキツネ、タヌキ、アナグマ等の巣穴が確認されている。又、当林にはカモシカが少なくとも5頭生息し(2005年12月現在)、この崖地を主要な通路としている。ムササビは、通称「せせらぎ広場」周辺で生息・繁殖している。イタチは、沢地や広瀬川周辺に生息し、繁殖も推測されている。ハクシビンは、管理センター周辺に巣穴が確認されている。ツキノワグマは、毎年のように春～秋に来訪していると考えられる。ノネズミ類では、樹林地にはアカネズミ、ヒメネズミが数多く生息・繁殖し、草地ではハタネズミが確認されている。モグラ類では、アズマモグラ、ヒミズが広く分布している。コウモリ類では、各所に開口している洞窟に、キクガシラコウモリ等が生息している。イノシシは2001年3月、ニホンザルは2003年5～6月に目撃されている。

青葉山市有林の野生哺乳動物相の特徴は、種数が多いこと、小型哺乳類が数多く生息していること、本州産大型哺乳類が(ニホンジカ以外)全て確認され、とりわけ、カモシカが生息・繁殖していること、テン等の奥山性の哺乳類が生息していること等が考えられるが、最大の特徴は、多種の一次捕食動物が生息していることである。本林内では、テン、キツネ、タヌキ、アナグマ、イタチ、ハクシビンの6種(ノイヌ、ノネコを含めると8種)が一年を通して生息・繁殖しているが、生態系、食物連鎖の頂点に立つ獣類の多さは、その被捕食者である小動物、野鳥、昆虫等の多さを表し、本林の自然の豊かさを証明している。

3) 哺乳類各種の生息状況

1. カワネズミ *Chimarrogale himalayica*

本州、四国、九州に分布。山地の溪流に生息、日中も活動して小魚、水生昆虫、ミミズ、サワガニ、カワニナなどを捕食する。かつては全国の河川域で普通に見かけられたが、護岸工事や餌となる動物類の減少で、各地で地域的絶滅が危惧されている。県内ではとくに山地の溪流で泳いでいるところを見かけるが、青葉山での目撃例は少ない。旧青葉山ゴルフ場と東北大学工学部の中の溪谷(竜ノ口上流部)で、目視・確認(1998

年5月) されている。

2. ジネズミ *Crocidura dsinezumi*

北海道の南部から九州にかけて分布する日本固有種。低標高地の農耕地や林縁部の地表面を利用し、おもに小型の昆虫類を捕食している。基本的には単独生活を送り、繁殖は年1回(春)、または2回(春と秋)であるが、青葉山における繁殖生態は明らかでない。墜落缶を利用した捕獲調査で記録があるほか、食肉類による捕殺個体を林内で見つけることもあり、生活形態のよく似たヒミズと一部地表部のニッチを共有しながら青葉山で生活していると考えられる。

3. ヒミズ *Urotrichus talpoides*

本州・四国・九州などに分布する日本固有種である。丘陵地や山地に多く見られ、主要な食物はミミズやクモ、ムカデ、昆虫などであるが、果実・種子なども採食する。繁殖は年1回と報告されている。地表部で活動することの多いジネズミと比較すると、ヒミズは主に腐植層の発達した林内において半地下生活を送っている。墜落缶調査で捕獲されるか、偶然発見される死体などによって、青葉山においても分布が確認されるが、詳細な密度や生態は明らかでない。

4. アズマモグラ *Mogera wogura*

ヒミズ同様モグラ科であるが、体は大きく、より地下生活に適応した形態を備えている。本州中部以北の平野から山間地に広く分布し、地下で生活しながらミミズや昆虫類を捕食している。地表からの深さ30～50センチ程度のところに比較的浅いトンネルを作っており、その中を徘徊して餌を探したり、時にトンネル内の巣で休息したりする。青葉山でも地表面に現れるときにできる塚を見ることがあり、塚をくずせばトンネルを観察することができる。湿り気のある、腐植層の土壌を好むことから、山中の分布密度にも相対的に偏りがあることが考えられるが、詳細は知られていない。地上に出てくことも多いようで死体を見ることはあるが、元気な生体を見ることは難しい。

5. キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum*

日本のほぼ全土に分布する普通種のコウモリである。廃坑、廃屋、用水路のトンネルなどをねぐらに利用している。青葉山市有林では、コウモリ穴や各所に開口している亜炭坑跡に生息している。

6. モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus*

国内では北海道～九州にかけて分布している。平地から丘陵、山地にかけて広く分布する普通種で、廃坑、用水路のトンネルなど底に水が溜まっている環境を好む。キクガシラコウモリのように天井にぶら下がるのではなく、隙間に潜り込んで休息している。青葉山では、広瀬川に面した崖面に開口している洞窟で確認されている。

7. アブラコウモリ *Pipistrellus abramus*

国内では北海道以外の地域に生息している。都市近郊で観察される小型のコウモリで、人家などの建物をねぐらとして利用している。青葉山市有林では、夏になると道路に設置してある街灯の周辺を飛行し、蛾などの昆虫を捕食する姿がよく目撃される。また、市有林内において死体も回収されている。

8. ヒナコウモリ *Vespertilio superans*

国内では、北海道、本州中北部、九州に分布している。家屋や海蝕洞を繁殖場所に利用しているが、青葉山はその渡りの経路として利用されている可能性がある。夏期の夕方、スイス池周辺を飛行して昆虫類を捕食する本種が確認されている(バットディテクターにおいても確認した)。また、2006年1月、宮城教育大学キャンパス内において、室内に迷い込みそのまま死亡した個体が回収されている。

9. ニホンザル *Macaca fuscata*

日本固有種であり、南は屋久島から、北は本州の下北半島まで分布する。平野部から山間部まで、森林を中心に群れ生活を送るが、群れの行動圏は地縁性が高く、特にメス個体は基本的に分散しない。植物を主とする雑食性。東北地方のニホンザル個体群は環境省レッドリストで絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

に区分される。

仙台市における群れ分布は奥羽山脈から連続し、青葉区上愛子地区まで続いている。青葉山では2003年5～6月に、単独個体が三居沢周辺で目撃されている。群れから分散するオス個体が100キロ近く行動する例も知られており、青葉山で目撃される個体は奥羽山系の南奥羽・飯豊南個体群から派出するハナレザルであると考えられる。単独個体の目撃情報は、少なくとも十年以上、数年に一度の割合で継続して得られているが、情報の継続性などから見て、ハナレザルが長期間滞在しているとは考えにくい。ただし、ニホンザル個体群が広瀬川沿いに下流方向に分布を拡大していることから、今後はハナレザルの出現頻度が高くなることもありうる。

10. ノウサギ *Lepus brachyurus*

本州～九州等に分布する日本固有種。亜高山～低地の森林や草原等に生息し、植物の葉、芽、枝、樹皮などを採食する。藪の中で繁殖し、一回1～4仔産み、早春から秋に数回それを繰り返す。夜行性で昼間は藪地等でじっとしていることが多い。青葉山では、早朝などに採食する様子等がよく目撃されている。冬毛は三型（褐色、斑、白色）に分かれ、雪が多い年は白色型が多く、少ない年は褐色型が多い傾向があるようである。藪周辺には糞や食痕が多く見られ、時にテンやオオタカに襲われた残骸が観察されている。冬季の雪面には最も普通に、数多くの足跡を見ることができる。

11. ニホンリス *Sciurus lis*

本州～九州等に分布する日本固有種。西日本には少なく、九州では近年確認されていない。低山～平地の森林に生息し、堅果や種子、キノコ、果実や昆虫類、鳥の卵等も採食する。青葉山では、アカマツやスギ、ヒノキ、オニグルミの木立等で主として早朝によく観察され、木の枝の股を利用した巣も各所に確認されている。小枝を組んだ球形の巣には、冬季スギやヒノキの皮が大量に敷き詰められる。食べ残された松毬やクルミも大量に落ちており、地上で採食することが多い。冬には足跡がよく残っている。夏毛は赤っぽい、冬毛は灰色で耳元にふさ毛が生える。秋季、貯蔵の為に

地中に種子を埋め、それを取り残すことによって森を育てる役割を果たしている。

12. ムササビ *Petaurista leucogenys*

本州～九州に分布する日本固有種。亜高山～低地の大木の多い林に生息し、前脚と後脚の間の皮膜を広げて滑空し、若芽、葉、花、果実、種子等を採食する。青葉山では、通称「せせらぎ広場」周辺のスギ、ヒノキ、の人工林を峙にしており、夜間には飛翔する姿や、ギギーッ等と言う声を聞くことができる。三居沢付近でも目撃されている(1994年10月)。よく利用される木は、樹皮が爪痕でささくれ立っている。

13. ヤチネズミ *Eothenomys andersoni*

日本固有種で、本州中部と北陸以北、紀伊半島南部に分布している。低地から高山まで広く分布しているが、岩場や畑の石組みなどで目撃されることが多い。青葉山市有林では、沢沿いの岩場で目撃されているほか、1999年10月に通称三階滝上部の沢で死体が確認された。

14. ハタネズミ *Microtus montebelli*

日本固有種で、本州、九州、佐渡、能登半島に分布している。平地から高山帯まで広く分布しており、農耕地、植林地、牧草地、河川敷など、草原的な環境を主な生息地としている。草地や畑の地下にトンネル網を張りめぐらし、草本類や根菜類などを採食する。青葉山市有林では、広瀬川の河原や畑で目撃されているほか、2003年7月に宮城教育大学グラウンド北側の草地で死体が確認された。

15. ヒメネズミ *Apodemus argenteus*

平地から高山帯まで分布し、森林に好んで棲息する。木登りが得意で半樹上生活をする。植物の種子・果実・昆虫などの小動物を食べ、稀に草や木の葉も食べるが、液果に対してとくに強い嗜好性を示す。頭胴長65-100ミリで、アカネズミと非常によく似ていて区別しにくい、顔つきや体つきが多少異なり、尾長は相対的にアカネズミより長い。青葉山の林内で生息するが、密度などは明確でない。

16. アカネズミ *Apodemus speciosus*

全国の平地から高山帯まで広く分布し、森林や河川敷などに棲息する。植物の根茎・種子・果実・昆虫などを食べる。体色は明るい茶色～黒茶色。ヒメネズミと一見、非常によく似ていて区別しにくい。頭胴長80～140ミリ。木の根元や地中の穴などで日中休息し、夜間に活動している。ドングリの貯食で知られており、森林更新に大きな役目を果たしているといわれる。青葉山のさまざまな植生の森林で普通に見かけられる。

17. ツキノワグマ *Ursus thibetanus*

ヒマラヤ～東南アジア～中国～朝鮮、沿海地方、日本では本州、四国等の冷温帯落葉樹林（ブナ林）を中心に生息し、主に春は若芽や草本、夏には昆虫類、秋には木の実等を採食する。青葉山では、古い爪痕が残ることから、以前から生息（奥山との往来）していたと考えられるが、1975年の東北自動車道完成以降は観察記録が稀になっていた。しかし、新しい爪痕や目撃情報等から、毎年のように初夏から秋に来訪し、ウワミズザクラ等の果実やアリ、ハチ等の昆虫類、ミズナラ等の堅果類を採食していることが確認された。往来経路は広瀬川等が推測され、渇水期に川を渡る姿も目撃されている。2004年8月には、管理センター側のハリエンジュ（ニホンミツバチの巣がある）を訪れ爪痕を残す等したため、「クマ騒動」となった。当林内での越冬記録はないが、爪痕の他、糞や足跡も各所で確認されており、夏～秋の一時期のみにしろ、本種の生息は、この森の自然の豊かさを証明している。本州全体では毎年2,000頭近くが捕殺されており、保護対策が望まれている。

18. キツネ *Vulpes vulpes*

ユーラシア～北米に分布し、日本でもほとんどの地域に生息するが、四国では稀である。北海道産をキタキツネ、本州産をホンドキツネとして区別することがある。主にネズミ類、ノウサギ、鳥類を捕食するが、果実類も食べる。主として単独で過し、5～50kmの行動圏を持つ。青葉山では、広瀬川に接する崖地等に巣穴が確認され、繁殖情報もある。夜間には車道を

横切る姿がよく観察されている。歩道上等に糞・足跡も多く、特有の匂いのする糞は、小動物を食べた後は硬くて灰白色になる。冬季の雪上には、ノウサギ（足跡）を追い駆ける足跡がよく見られる。食物連鎖の最高位にある本種の生息・繁殖は、青葉山市有林の豊かさの証である。

19. タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

自然分布はアジア極東部に限られるが、毛皮獣として移入されたものが東欧を中心にして分布を広げている。山地～郊外の住宅地周辺にまで生息し、ネズミ等の小動物やミミズ、ナメクジ、昆虫類や果実も好んで採食する。青葉山では、広瀬川沿いの岩の割れ目等に巣が確認され、初秋に子連れの家族に出会うこともある。夜行性にも関わらず日中もよく出現し、青葉山の緑を守る会の観察会でも3度観察されている。笹藪等では溜糞（縄張り識別と情報交換の場）も散見される。疾病によるものと推定される死体が度々確認されていることは懸念の材料ではあるが、青葉山市有林において一次捕食者である当種が数多く生息・繁殖することは貴重である。

20. テン *Martes melampus*

北海道～九州、朝鮮半島南部に分布。主に深山の樹林帯に生息し、げっ歯類、鳥類、爬虫類、両性類、昆虫類や果実類等様々なものを採食する。行動圏は、平均70ha程と言われるが、2300haとの記録もある。青葉山でも一年を通して生息しており、小動物の他、ノウサギやヤマドリ、キジ等も襲い、特に冬季には狩りの痕跡がよく観察されている。夏毛は褐色、冬毛は美しい黄金色、夜行性で目撃は困難だが、雪の降る早朝等によく目視・確認されている。糞や足跡は、三居沢付近でも容易に観察できる。雑食性で、肉食の場合は黒く細い糞になるが、漿果等を食べた後は、ほとんど種子だけから成っている。木登りが上手く、サルナシやアケビ等もよく食べている。行動圏が広いと、糞により種子散布の役割を果たしている。なお、市有林以外では東北大学植物園や旧青葉山ゴルフ場、竜ノ口溪谷等でも生息が確認され、画・映像も撮影されている。生態系食物連鎖の頂点に立つ、奥山性のテンが生

息することは、青葉山の自然度の高さを示している。

21. イタチ *Mustela itatsi*

本州～九州等に分布。山地～平地の水辺近くに生息し、主にカエル、カニ、小魚等の水生小動物やネズミ類、昆虫類等を捕食する。青葉山では、沢沿いや広瀬川沿いでよく目撃され、繁殖情報もある。砂や泥上には足跡が容易に観察できる。細長い糞は、川原の岩石上等に見られるが、岩陰等には溜糞が形成されることも多い。本種も一次捕食者であり、青葉山市有林におけるその生息・繁殖は貴重である。

22. アナグマ *Meles meles*

ユーラシア北部に広く分布し。日本では本州～九州の山地の森林に生息し、小動物や土壤動物の他、果実等も採食する。青葉山では、広瀬川に隣接した斜面中部に巣穴が確認され、度々目撃もされている。足跡は長い爪が鋭く、小型のクマに似ている。本種も一次捕食者として、青葉山市有林の豊かさを示している。

23. ハクビシン *Paguma larvata*

東南アジアから中国南部、日本では本州～九州（非連続的に分布）の山地の森林に生息し、小動物、昆虫類等を採食し果実も好む。青葉山では、管理センターから20m程の所等に巣穴を持ち、頻繁に目撃されている。センター棟の床下は、四方コンクリートの落とし穴状になっていたため、落ち込んだ個体が幾度となく確認された。全国的に増加傾向にあり、青葉山でも、生息環境が競合するタヌキやアナグマ等への様々な影響が考えられている。帰化動物との見方が強いが、日本産亜種と同一形態のものは他に認められておらず、古文書にある「雷獣」だとの説もある。本種も一次捕食者として、青葉山市有林の豊かさを示している。

24. イノシシ *Sus scrofa*

北アフリカの一部からユーラシアに広く分布する。日本では本州以南の雪の少ない地域に生息し、県内では、阿武隈川以北にはいないとされていたが、近年北上を続け、太白山、蕃山等でも目撃されている。青葉山でも2001年3月、通称「わんぱく広場」下方の沢

地の砂泥地等で足跡が確認されているが、その後の記録はない。宮城県レッドデータブックで要注目種に指定されている。食性は雑食性で、各種植物から小動物まで何でも採食するが、クズ、ヤマノイモ等の根茎を特に好む。

25. カモンシカ *Capreolus capreolus*

本州～九州のみに分布する日本固有種で、国指定特別天然記念物である。亜高山～低山の落葉樹林、針広混交林に生息し、木本類の葉、広葉草本、ササ類等を選択的に採食する。通常、一年を通して10～20haの縄張りを持つ。青葉山では、角擦り痕の古さ等から言っても、かなり以前から生息していたようではあるが、1975年の東北自動車道完成後はあまり観察記録がなかった。それが1998年頃から頻繁に目撃されるようになり、青葉山市有林の他、青葉山国有林、東北大学植物園、旧青葉山ゴルフ場等に生息するようになった。目撃情報は上記地区の他、青葉城址、追廻地区、八木山、宮城霊園、放山、八幡五・六・七丁目等でもあり、全地域で角擦り等の痕跡も確認されている。放山地区等との往来は、足跡や目撃情報から、渇水期の広瀬川や工事用橋脚を利用していると思われる。蕃山・太白山地区との往来は、橋脚や隧道等が推測されているが、確認されていない。

市有林では、周年生息が確認され（夏季、行動圏を他地域に変える個体もあるが）、2001年には母子（一年仔）を確認し、その後2005年まで5年間連続で繁殖が確認されている。2002年繁殖の母子の個体識別はできていないが、2003年以降の母親は全て同一個体である。現在（2006年1月）本林内を行動圏としている個体は、少なくとも5頭が確認できる。メス個体＝母（アオと命名）、2005年生まれの個体（アオの子でユメと命名）、2004年生まれの個体（アオの子でセンと命名）、2000年？生まれのオス個体（サンと命名）、オス？個体（センと命名）の5頭である。その他、オス？個体（ヒロと命名）、2002年生まれの個体（トトロと命名）、2003年生まれの個体（フワと命名）等が市有林内周辺（青葉山国有林、東北大学植物園、旧青葉山ゴルフ場、及び放山地区を含む）を行動圏に含んでいるものと推定されている。近親交雑の可能性も

高く今後の不安材料ではあるが、青葉山市有林が本種にとって非常に良い生息・繁殖環境にあることを意味しているものと推測される。その理由としては、①本種の好む植物（アオキ、コゴメウツギ、モミジイチゴ等）に富む、②雪が少なく温暖な上に、雪が積り難いモミ、スギ、ヒノキ林が多く、冬季も食料を確保できる、③野犬等の天敵がいても逃げ場となる岩場やガレ場が多い、④休場（埒）となるモミ等の大木や岩場がある、等であると考えられる。百万都市仙台のほぼ中心部に於けるカモシカの存在（周年生息・毎年繁殖）は、青葉山の自然が極めて豊かであることを証明している。

4) 希少種について

青葉山市有林で確認された種の中で、希少種としてレッドデータブックなどに記載されている種は以下の通りである。

国指定特別天然記念物 カモシカ

環境庁レッドデータブック

[絶滅の恐れのある地域個体群 (LP)] ニホンザル

宮城県レッドデータブック

[絶滅の恐れのある地域個体群 (LP)] ニホンザル

[要注目種] イノシシ カモシカ

4. おわりに

青葉山市有林は、100万都市仙台のほぼ中心部に位置しながら（市役所から2km）、多種多様な鳥類や小型哺乳類が多数生息することから、それらを餌とする獣類もまた多種生息している。この事が、本林の最大の特徴であり、自然の豊かさの証明ともなっている。その中でも代表種と言えるものがテンで、その生活・行動圏には、東北大学植物園や旧青葉山ゴルフ場、竜ノ口溪谷等が含まれ、度々画・映像も撮影されている。旧青葉山ゴルフ場地域では、足跡の他、ノウサギ等の狩の痕などが確認されており、本地区は本種の通路兼

狩場となっている。「地下鉄東西線」と「都市計画道路」の工事予定地である竜ノ口溪谷地域も、本種の通路、採食場として周年使用している極めて重要な地域である。また、国指定特別天然記念物であるカモシカの生活・行動圏にも、東北大学植物園や旧青葉山ゴルフ場等が含まれ、とりわけ、竜ノ口溪谷が主要な通路、休場、採食場となっている。角擦り痕、食痕、足跡、溜糞や目撃情報も多い。

今後、各建設工事が進み、旧青葉山ゴルフ場地域や竜ノ口溪谷地域の自然破壊が進行すると、生態系の回廊（コリドー）が分断され、青葉山市有林を含む青葉山全域の自然破壊が進むことが予想される。テンやカモシカは東北大学植物園、旧青葉山ゴルフ場や竜ノ口溪谷地域等から消滅し、青葉山市有林における生息環境も極端に悪化する可能性がある。テンやカモシカに象徴される、青葉山の豊かな自然が、後世にいつまでも引き継がれることを心から願うものである。

謝 辞

これまで青葉山市有林の生物相調査を継続することができたのは、青葉山の緑を守る会（植村千枝会長）のメンバーや宮城教育大学環境教育実践研究センターの学生・スタッフの協力があったからこそである。また、青葉の森管理センターをはじめとする関係機関の皆様には諸種の便宜をはかっていただいた。この場をお借りして心からお礼申し上げたい。

引用文献

- 阿部 永（監修），1994. 日本の哺乳類．東海大学出版会．195pp.
- 伊沢紘生，1998. EECプロジェクト研「仙台市内広瀬川及び名取川流域でのSNC構想の実践」．宮城教育大学環境研究紀要，1:63-70.